

フロイデン行(その二)

帝国暦四八九年九月二九日早朝、マリィンドルフ伯爵令嬢にして帝国宰相首席秘書官であるヒルダことヒルデガルト・フォン・マリィンドルフは帝都を遠ざかる地上車の中にあつた。晩秋にさしかかり、日の出の遅くなつた帝都にまだ夜明けの日射しが指し染める前、薄明の中での出発である。まるで人目を惹くのを恐れるかのような慌ただしさであり、この時刻の出発を定めた女の意思がそこにあつたのも事実だつた。

その女は、今、ヒルダの斜め前、地上車の最後部座席に静かに身を沈めている。薄闇の中でさえ、見る者の目を引き寄せ、引き留めずにはいられぬほどの優美な姿と、黄金色の霧を帯びているかに見える鮮やかな髪の色が、この女性の素性を語つて余りあつた。

グリユーネワルト伯爵夫人アンネローゼ。現帝国宰相ローエングラム公爵ラインハルトの実の姉であり、帝国内においては先帝フリードリヒ四世の寵姫として知られる女性だつた。

「こんなことをあなたに頼むのは筋違いだとは分かっているのだが――」

銀河帝国史上最強の権力者。事実上の独裁者であり、至近の未来において彼が皇冠を頭上に戴くのは既に既定の事実、とするのが衆目の一致するところである。

強大無比の独裁者の口調は、しかし、彼の手にしている絶対的な権力の巨大さにまるで似つかわしくもない――優しい姉を哀しませるのを

恐れる少年のそれだつた。

「できれば、わたし自身が姉上をお送りしたいのだ……」

それを姉上は喜ばれないだろうし、決して許してもくだらぬだろうから。

「せめて、わたしの名代として、フロイデンまでお送りして……できれば、一晩で良いからお話を伺つてきて欲しい」

「――？」

首席秘書官としてラインハルトの言葉の意味を理解できなかったことはほとんどない。自惚れでなくヒルダはそう思っている。この時は、稀少な例外といふべきだつた。期限を定めずアンネローゼをフロイデンの山荘へ『幽閉』し、その間は許可……他ならぬラインハルト自身の許可だ……なく、何人たりとも面会を許さない。そう定めたのはラインハルト自身なのだから。

思い、そこでヒルダは察することができた。

「承りました、閣下」

「ご無事にお送り申し上げます、とは敢えて言わなかった。アンネローゼには、すでにラインハルト自身が嚴重過ぎるほどの警備を手配している。ヒルダー人が加わつたところで、警備の万全さに何ほども資するところはないだろう。また、ラインハルトが彼女に求めているのもそんなことではないのだから。」

ラインハルトが帝国宰相の名で発令したアンネローゼへの処置。帝国暦四八九年一〇月一日午前零時より無期限に、グリユーネワルト伯爵夫人アンネローゼを、フロイデン山地の彼女自身が所有する山荘に居住せしめ、皇帝の勅許を得るまでは山荘とその敷地を踏み出すことを許さない。また、許された使用人と警備責任者以外の面会は、何人たりともこれを許さない。たとえ、実の弟であるラインハルトであろうと、そのラ

インハルトが我が半身として絶対的な信頼を寄せているはずのジークフリード・キルヒアイスでさえも、その例外ではない。

「これをして我が姉に対する幽閉措置と取ってもらって構わない」

ラインハルトはそうまで言い切っているのだ。

勅令としてこの布告が為された時、様々な噂が、一瞬ごとに数を増す尾鱗を無数に伴って帝国、特に帝国政府の中枢を泳ぎ回ることになった。曰く、ローエングラム公は先帝の寵姫たるアンネローゼが将来の戴冠の障碍になると考えて彼女を遠ざけようとしたのだ、と。アンネローゼが現皇帝エルウィン・ヨーゼフ二世のただちの廃立を求め、ラインハルトがこれを拒否したのだとする者があり、逆にエルウィン・ヨーゼフ二世の即事退位を求めようとしたラインハルトをアンネローゼが諫めたことで二人の間に抜き差しならぬ対立が生じたのだとする説までが登場した。穿ったものになると、二人の間に意見の相違が生じたのは皇帝誘拐事件の事後処置、特に事件を主導した人物の扱いに關しての対立が深刻化したとする噂までが現れるありさまだった。

ヒルダは、そのいずれにも与する者ではなかったが、逆に、それゆえにこそ、この時期にラインハルトがアンネローゼを遠ざけねばならない理由を理解しかねていたとも言えた。

つい先日、父マリーンドルフ伯と二人きりで話す機会を得た時、ヒルダは父に向かつて、彼女自身の分析を口にしてている。

「ローエングラム公爵にとつて、絶対に失ってはならないものはただ二つあり、二つしかないと思います」

「——グリユーネワルト伯爵夫人と、キルヒアイス提督の二人……だね？」

「ええ」

この時、ヒルダは彼女がよく知る、そして今は既に故人となったある

人物を、ラインハルトに重ねていた。

「ローエングラム公にとつて姉上とキルヒアイス提督は、公が、すべてが完全だと思つて決して欠いてはならない存在なのだ、そう思っています」

一般に、マリーンドルフ伯フ란ツは温厚で篤実な人柄をその最大の特徴とする人物として知られ、殊更に洞察力や才気に優れた存在とは思われていない。

だから、この時の父が口にした言葉は、ヒルダを驚かせるに足りた。

「お前はどうかだね。お前は、ローエングラム公にとつて不可欠の存在ではないと、そう思ふのかな？」

「わたし——？」

驚きがヒルダの声を上ずらせ、自分が抑制を失ったことが更に彼女を驚かせた。

「わたしが……ですか、お父さま？」

「そう、お前が、だよ、ヒルダ。ローエングラム公が、お前をその他大勢の、失つても償いの付く程度の存在だと思つておられるとは、私には思えないのだがね。親の欲目かも知れないし、その程度の娘の親でしかないと自分を思いたくないと、これは父親の矜持プライドというものだろうけれどもね」

「わたしのことを、ローエングラム公が、どう思つておられるか……と？」

マリーンドルフ伯は温顔に微笑を含ませながら、ここ数年は父の前でさえめつたに見せなくなつた、娘の狼狽ぶりを観察していた。ヒルダは、何とか表情を落ち着かせようと何度となく試み、ついに無駄を悟つて両目を閉ざした。

「わかりませんわ、お父さま。有能な部下だと思つていてくださること